感染者の創造

岡田健四郎　原案：岡田健八郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

感染者の創造

【Ｎコード】

Ｎ６７９２Ｘ

【作者名】

岡田健四郎　原案：岡田健八郎

【あらすじ】

ある事件が起きる十数年前、世界中を放浪し、フィリピンに流れ着いた黒木は古美術収集家の男と知り合い、考古学発掘隊に加わることになった。発掘現場で、ウイルス学者の野村や山岸、そしてフィリピン人の少女のアイビと出会い、親交を深めた。だが、その頃から、黒木の周囲で奇妙な連続猟奇殺人事件が発生し始めた。一方アイビは、自身の体が変わり始めたと実感し始めた。

百獣の王の死

ある事件より１２年前

風がすすり泣くように音を立てながら、海を渡っていた。
ライオンは走っていた。追手よりも速く。ライオンは追手よりはるかに強く、敏捷で、凶暴である。単独で狩りをしても、自分より体格の大きい獲物を倒したこともあった。

追手は走っていた。ライオンよりも遅い。追手は獲物よりはるかに弱く、小さく、簡単に死ぬ。だが、ライオンよりも狂暴だった。
ライオンはこれまで、多くの獲物を殺したことがある。自分の縄張りを荒らした動物を八つ裂きにしたこともある。
だが、今回は違う。
ライオンの堂々とした狩り、外見は百獣の王にふさわしかっただろう。
だが、今回は違う。
野生の雌ライオンは、野性的本能で生命の危機を感じていた。
自分を追う者は、自分よりもはるかに弱い。
だが、今回は違う。
その鋭い爪は獲物の体を引き裂くことが出来る。その鋭い牙は獲物の体を噛み砕くことが出来る。その鋭い嗅覚は獲物を逃すことはない。
だが、今回は違う。
今回は追手が狩人であり、自分が獲物だ。
本来なら、敵を自分の生まれつきの武器で殺すことが出来る。
だが、今回は違う。
自分の野生で鍛えられた本能と危機管理力が、敵と戦ってはならないと語っている。

ただ、今回はひたすら逃げろ、体が脳にそう訴えかけた。
脳は逃げることを選択した。
ライオンは走り続けた。追手が追跡を中断するのを待った。
だが、追手は追跡し続けた。
ライオンはこれほど恐怖と屈辱を感じたことがない。
強者が弱者に逃げるなどと――――
ライオンは立ち止まった。
目の前は、深い崖が広がっていた。
引き返そうと振り向いた瞬間、追手はすぐ近くに居た。
追手はうなり声を発した。
ライオンは、死を覚悟した。
追手は人間だった。
そしてライオンは見た。
人間の目は赤かった――――

依頼（前書き）

【主要登場人物】

黒木大輝（くろきたいき）
天才生物学者。１人旅を趣味とする。異性に興味がない。美術と独身生活を愛する孤独な男。

野村（のむら）たけし
ウイルス学者。新種ウイルスを発見し、歴史に名を残すことを夢見ている。

フェルディナンド・アイビ
フィリピン人少女。元気のある優しい美人のため、学校ではアイドル的存在。

山岸薫子（やまぎしかおるこ）
野村の助手。自分の問題は自分で解決するべきと考えており、誰にも心が開けない。

山岸百合（やまぎしゆり）
薫子の妹。姉とは反対で誰にでも心が開ける。

カルロ・アリギエーリ
イタリア古美術収集家。黒木と面識がある。

ジョン・ハドソン
傭兵部隊総隊長。老人だが、強靭な肉体を持つベトナム戦争経験者。ベトナム戦争での影響か、アジア人を恐れている。

ロシュ
武装傭兵部隊隊長。戦争経験者だが、どの戦争経験者かは言わない。

シャルトラン
武装傭兵部隊少尉。

マクシミリア神父
フィリピン教会の神父。ヨーロッパ人。元エクソシスト。

依頼

彼ははっと周りを見渡した。そこは殺風景の平地だった。地面には、大勢の兵士の死体が転がっていた。兵士と言っても、明らかに古代の兵士だ。彼は兵士の鎧と盾を見た。ローマ兵だった。

黒木大輝は、はっと目を覚ました。頭がぼんやりしたまま、ベッドから降りた。

「…夢か…」

大輝は頭を働かせようと頬を叩いた。電話が鳴っていた。

「えっと…もしもし？」

「クロキタイキトオハナシガシタイ」片言の日本語だ。訛りからしてイタリア人かな？

「イタリア語で大丈夫です」とりあえず日本語で言ってみた。

すると、向こうはイタリア語で何かを言った。大輝は頭の中で訳した。こいつは確か、黒木大輝に用があると言ったな。

「私がそうです」イタリア語で答えた。

「やあ大輝君。君に話がある」やけに馴れ馴れしい人だな。

「失礼ですが、どなたですか？」

「おっと、名前は名乗らないとな。私はカルロ・アリギエーリ」

カルロ？どっかで聞いた名だな…

「君に助けられた男だ」

そう言えば、この前バスの中で突然倒れた老人が居たな。俺がすぐに緊急措置を取ったおかげで一命は取り留めたけどな…

「えっと、何の用ですか？礼なら要りませんから」

「実は私は来週フィリピンに行くことにした」

「それはそれは、おめでたい」

「そこで是非にと君に同行してもらいたい」

耳を疑った。「同行？失礼ですが、話がまったく掴めません」

「君は優秀な生物学者だと、君の同僚が言っていたぞ」
「確かに生物学は得意分野ですが、あくまで生物学であって、医療技術ではありません」
「同じことだ」
「いいえ、まったく違います」
しばらく沈黙が続いた。
「では、もしフィリピンで古代遺跡が見つかったと言ったら、君はどうする？」
黒木の血が騒いだ。古代遺跡だって？」
「本当ですか…？」興奮を押さえた声で聞いた。
「ああ。つい最近、フィリピンに滞在中の私の執事が、フィリピンで遺跡を発見したと」
「それで？」
「私は古美術などに興味があってな。話によると君は美術や遺跡などを愛する男だと聞く」
黒木は完全に負けた。「あなたの勝ちだ。同行させてください」
その返事に向こうは満足した。
「来週だ。自家用機でフィリピンに行く。集合場所は、ジュネーヴ」
「ニューヨーク州のジュネーヴですか？」
「スイスのジュネーヴだ」
「なら、そちらに行くのにかなり時間が掛かりますね」
「なぜ？」
「日本とヨーロッパは遠いんですよ？」
「君はイタリアに滞在中だと聞いたが」
そうだった。あの悪夢のせいで自分は日本にいると思っていた。
「では、来週ジュネーヴに行けばいいんですね？」
「詳しい場所はファックスで送る」
「では」
「いい夜を」
電話が切れた。

黒木は眠れないときの特効薬――湯気が立つココアを味を楽しむようにゆっくりと口に注いだ。
彼の両親は大富豪であったため、世界各地に別荘を建てている。イタリアも例外ではない。
彼の部屋は生物学の博物館のようだと、両親にからかわれた記憶がある。動物図鑑、人体模型、小型動植物の標本、ウイルスレポートなどが、部屋に飾ってある。
黒木は木製の椅子に腰をかけ、ココアのぬくもりを味わった。
彼は昔から図抜けた美男子とまでは行かないが、同級生や同僚が、理知的と評する魅力があった。
豊かな黒い髪、好奇心に満ちた鋭い瞳、人の心をつかむ、渋い深い声、運動選手並みの肉体、大人びた顔。同じ研究所に勤める女性研究員たちからは、かなりの人気と人望があった。
学生の頃は謎の少年扱いされ、好奇心の目を向けられた。知識が豊富で勉強ができ、なおかつ運動神経も良かったことからか、バレンタインデーには山のようなチョコを貰った。どの教科の発表でも手を抜かず、コンピューター・グラフィックなどで分かりやすく説明するため、いつも発表の時は生徒からも教師からも期待されたものだ。
黒木は鏡で自分を見つめた。昔から何も変わっていないな。唯一変わったことは、面白みが減ったことだ…
幼少の頃から、あらゆるものに興味が出たら、図書館やインターネットでよく調べたものだ。独自の調査書を作ったこともある。生物学と美術と宗教は特に興味があった。生物学者になったのも、興味があったからだ。何百種類もの細菌やウイルスを調べるのは楽しかったな。
だが、年をとるごとに、段々と面白みが減った。今ではウイルスと美術以外には何も興味がない。
昔は良かった。昔は世界は未知のパンドラボックスだったな…

よく同僚達に言われたものだ。
「お前に＜愛＞はないのか？」
そのたびに決まって答える。
「俺は３つのものを愛してる」
黒木が人生で愛の対象になっているもの――――生物学、美術、独身生活。
最後の独身生活は、黒木にとって自由そのものだった。何にも縛られることなく、世界を旅したり、好きなだけ眠ったり、好きなだけ食べたり、好きなだけ勉強したり、好きなだけ遊べたりする。
独身生活はいい。まさに神が、俺に与えてくれた最愛の生活だ。
１匹のシュパード犬が舌を出しながら黒木の所にやって来た。
おっと、もう２つ愛するものがあったな。愛犬のサム、そして、エヴァンゲリオン。
ファックスが受信した。紙がゆっくりと出てきた。
「完璧な予定だ。来週から忙しくなるぞ」
ファックスには地図が載っていた。

フィリピンへ

黒木大輝は物音を聞いた。
窓ガラスをとんとんとんと、何かが叩いていた。
はっと顔を上げ、腰を浮かせ――――手元の書物が滑り落ちた。
それから――何だ、雨か。
大輝はほっとする。誰かが叩いていたら、それはそれで恐ろしいな。
ここは2階だ。書物に戻る前に、電気スタンドに手を伸ばして、灯りをつけた。
スタンドの光が大輝の顔を照らした。大輝は縁なし眼鏡を掛け、書物を読み始めた。
まったく、それは素晴らしい書物だった。時間の経過が、まるで分からなかったのも不思議ではないくらいだ。『クトゥルフ神話』。ハワード・フィリップス・ラヴクラフトの描いた小説世界をもとに、ラヴクラフトの友人である作家オーガスト・ダーレス等の間で、架空の神々や地名や書物等の固有の名称の貸し借りによって作り上げられた、架空の神話体系のこと。
心理学者の友人が言ったことある。人は生命の危機にあうような恐怖は感じたくないが、絶対安全な恐怖にはあいたがるものだと。
まったくその通りだ！俺もその中の1人だ！。絶対安全な恐怖を味わうため、俺は店の棚から宇宙的恐怖、すなわち『クトゥルフ神話』に手を伸ばした。ラグクラフトは天才だよ！あの発想はどこから来ることやら。
大輝は『クトゥルフ神話』を本棚に戻すと、今度はヴィクトル・W・フォン・ハーゲン著『インカ帝国』に手を伸ばし、お気に入りのページを開いた。そして読んだ。

この踊りに合わせて打ち鳴らされる打楽器演奏には、ふつう、敵の戦士の死体で作った太鼓が用いられる。皮膚が剥がされ、腹部が

太鼓の役をするようにぴんと張られると、身体全体が一種のサウンド・ボックスの働きをして律動する音は、その開いた口から流れ出るというわけである。グロテスクではあるが、きわめて効果的である。

大輝は微笑して読み直した。グロテスクだが、効果的、か……まったくだ！　確かに、そうだったに違いない！人間の皮を、それも、恐らく生きたまま剥ぎ取って、太鼓にするなど、古代人の発想力は恐れ入る。そもそもこんな考えを出すなんて、どんな心理だろうか？

大輝は煙草を一服吸った。煙草を吸うと、体がのびのびした。これもニコチンの力か？あるいは、それ以外か……

鹿の頭の剥製が、大輝を覗いていた。

「何だ？何か質問あるか？」

大輝は煙草を銜えたまま、鹿の頭をまじまじと見ていた。この剥製ともお別れだ。彼は吐息をつくと本を閉じた。母さんはあの剥製が嫌いだったが、どこが嫌なのだろう？逞しく、力強いじゃないか？荷物がまとまった大型のスーツケースを持つと、愛犬のサムを呼んだ。サムは尻尾を振りながら、やって来た。

大輝は待ち合わせ場所に向かった。そこは、自家用ジェット機があった滑走路だ。

「やあ、黒木君（ミスター・ブラック・ツリー）」イタリア語が聞こえた。

カルロ・アリギエーリがやって来た。白髪染まりのオールバックの髪形をし、顎を引き締め、黒いコートを着ていた。

それにしても、黒木（ブラックツリー）だとは、何とも、まあ、素晴らしいセンスだ。

「こんにちは」イタリア語で返した。

「久しぶりだな。準備は？」

「出来ています」

自家用機の扉が開いた。

「さあ乗って。素晴らしい旅行の始まりだ」

素晴らしい旅行……古代遺跡が見れるのはいいが、場所がフィリピ

ンなのは不満であった。
　自家用機の中は、一般航空機とたいそう変わりないが、少し狭かった。だが、椅子の心地よさはこちらが上だ。大輝は右側の一番前に座った。その隣にカルロが座った。
「他に誰がいらっしゃいますか？」大輝は尋ねた。
「大勢だ。考古学発掘隊は先にフィリピンに居る」
「そんなに発掘隊が居るのですか？」
「実を言うと、大半は傭兵が占めている」
大輝は軽くうなずいたが、心底驚いていた。彼の傭兵のイメージは、屈強な体つきをしている野蛮な連中だ。
「傭兵を雇ったんですか？」
「アジアは信用できないからな」
確かにそうだ。フィリピンでビートルズが暴行を受けたことがあった。原因は、その時の首相がフィリピンでライブをしていたビートルズにパーティーの招待をしたが、これを断られたため、首相夫人が怒ってマスコミに「勝手にすっぽかされた」などと嘘をついたそうだったな。
「どんな傭兵がいらっしゃいますか？」
「ベテランばかりだ。忠誠心は無いがな」
スイス衛兵隊を雇いたいもんだ。バチカンの衛兵で、忠誠心は世界一だ。素晴らしい衛兵だ。
「スイス衛兵隊を雇ってみたいですね」
「なぜだ？」
「傭兵は金さえ払えば働いてくれる肉体派の連中ですからね」
カルロは満足げにうなずいた。「確かに。君とは完全に理解し合えると思うよ、ミスター・ブラックツリー」
大輝はそう思えなかった。理解しあいたいなら、まずはブラックツリーはやめろ。

考古学発掘隊

大輝は飛行機の中で寝てしまったのか、気づけば既にフィリピンについていた。
「いい夢は見れたかな？」
カルロが笑みを見せながら言った。
「すいません、どうも昔から俺は飛行機に乗ると寝てしまう体質なんで」
適当に言い訳を考え、言った。
「これからは？」
「車で現場まで向かう」
外にはワゴン車が待機していた。
大輝は、首を鳴らしながら、飛行機を降りた。
ワゴン車の後部座席に乗り、運転手がワゴン車を出発させた。大輝は退屈しのぎのために、夏目漱石の坊ちゃんを取り出し、読み始めた。
「車内の読書は目を悪くしますよ」
「安心してください。既に悪いです」
そう言えばとばかりに、大輝は聞いた。
「俺の愛犬は？」
「後で届きます」
それを聞いて安心した。犬は人よりも忠実で、飼い主を裏切らない。俺が世界で唯一、信頼できる人物だ。いや、犬物か……
「到着までは？」
「もうすぐですよ」
そこは人気の無い、町外れの乾燥地だった。
だが今は、多くのテントがある。
よく見ると、武装した人物達が居る。
「あれは？」

「雇った傭兵だ。みなベテランばかりだ」
大輝にとって、兵士はベテランかベテランじゃないの問題ではなく、忠実か忠実じゃないかの問題だった。忠実じゃない兵士はいつ裏切っても、おかしくないからな。
車が止まり、カロルは下りた。大輝も慌てて降り、カロルの後ろについてきた。
1人の男が来た。男はオールバックの白髪で、青い目をし、しわだらけの顔をしている。
だが、１９７０年の起きたベトナム戦争でのアメリカ軍のような、熱帯野生服を着ている。
Ｍ１９５６型個人装備を着け、手榴弾2個をぶら下げ、やって来た。
明らかに老人であったが、年齢を感じさせない屈強な体つきをしていた。つまり、マッチョだ。
「やあジョン。こちらは日本人のクロキタイキだ」英語でカルロが説明した。
「どうも、武装傭兵部隊総隊長のジョン・ハドソンです」
「どうも、黒木大輝です」
大輝は左手を差し出した。ジョンは一瞬ためらったが、快く握手した。
ジョンは2人を案内した。
「黒木君、ここでは英語でしゃべれよ」
カルロは黒木に小声で忠告した。
テント内に入ると、2人の男が種類を纏めていた。
「こちらは、考古学発掘隊護衛部隊隊長のロシュです」
ロシュがお辞儀した。ロシュは背が高く、剛直で意思が固そう顔だ。黒っぽい髪を軍隊風に短く刈り上げ、その青い眼差しは、まるで歴戦戦士のように鋭く、強靭な意志が宿っていた。
黒いアルマーニのスーツを着て、右耳に用心深くイヤホンを隠したその姿は、傭兵とは程遠いシークレットサービスのようだ。

「こちらはシャルトラン。武装傭兵部隊少尉だ」
シャルトランは、アメリカ陸軍新装備ＩＩＦＳに似た装備をしていた。
顔は細長く血色が悪い。並外れた痩身で、無装飾のアメリカ軍制式採用銃のコルトＭ１６Ａ２を右手に抱えながら近づいてきた。
「テントの裏で、部隊が準備しています。遺跡の入り口はテントの裏です」
シャルトランは恐ろしいくらい低い声で言った。
テントの裏に案内された。
裏では、５人の男が迷彩服や野生服などを着て、旧ソ連のよって開発されたテロリストの銃ＡＫ４７やその進化型ＡＮアバカンなどを装備して、待機していた。
よく見ると、２人は傭兵らしくない人物が居た。
「あの人たちは？」
大輝はカルロに聞いた。
「今回の医療係を担当する野村たけしと助手の山岸薫子だ」
野村は白衣を着ていた。眼鏡を掛け、無造作なぼさぼさな髪型だ。
助手の山岸薫子は、袖なしの白いシャツとチノクロスのショートパンツという格好で腕を組んでいた。体つきはしなやかで背が高く、長い黒髪、図抜けた美人とは言わないが、大輝は動物的な強さを彼女から感じられた。遠目では分からなかったが、以外に巨乳だ。
大輝の前では、巨大な崖が聳え立っていた。
入り口と思われる場所には、正四角形の穴が開いていた。穴の周りには、細長い木の板が打ち付けられてた。
大輝は感心した。これぞ地獄の入り口だ。崖が崩れたら、俺は死ぬな。
「いつ中に？」
大輝はカルロに尋ねた。
「先に調査隊を送ったが、数分前に通信が途絶えた」
代わりにジョンが答えた。

「原因は？」
「いまだ不明。電波の届かない位置に居るだけだと思うが、万が一の事態も考えられる」
大輝はぞっとした。昔の古代人の仕掛けた罠に引っかかったのか？
カルロはジョンに聞いた。
「調査隊の装備は？」
「ＵＺＩやイングラムＭＡＣ１１などといたって軽装備です」
どこがだと大輝は思った。ＵＺＩとＭＡＣ１１はよく映画で無法者が撃ちまくる銃じゃないか
「早速中に入ろう」
「分かりました。ロシュ！」
ロシュが慌てて駆け寄ってきた。
「何でしょうか！？」
「お前が護衛部隊を指揮するんだ。分かったな？」
「了解しました！」
ロシュは敬礼した。
ロシュを始めとして、シャルトランと5人の傭兵が中に入り、カルロが大輝と野村とその助手の薫子を連れて、後に続いた。
中は思ったより暗く、通路は狭かった。
「私は野村です。こちらは山岸」
野村は右手を差し出してきた。
「俺は黒木大輝」
大輝は握手した。
「良かったですよ。同じ日本人が居て」
「まったくですな」
本当はそう思っていない。なぜなら相手は得体の知れない男と女だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6792x/

感染者の創造

2011年11月9日21時07分発行